

Marvel戦争記 第一章

帰宅部長 θ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

Marvel Comicsに登場する人気ヒーローたちが世界平和のために様々な強敵に立ち向かっていく、。が中には個性的すぎるヒーローがおりヒーロー同士が戦ってしまうこともある様である。さあはたして彼らは強敵から世界を守ることはできるのだろうか、。。

目次

V Sベクター編 第0話 ヒーロー結成

！ 名は、、「アベンジャーズ？」

1

V Sベクター編 第一話 ヒーロー会議

5

V Sベクター編 第二話 突然の奇襲

11

V Sベクター編 第0話 ヒーロー結成！ 名は、ゝ、「アベンジャーズ？」

「トニー、あなた宛てに手紙が届いているわよ」

助手ペツパーが明るく言う

「手紙？電子メールのほうがウエルカムだったのに。」

トニーはそう言い手紙をもらい読もうとするがすぐに突き返した。

「これは僕宛てじゃない。そうだ。僕はTVに出たりラジオに出たりで忙しいんだ。これを読んでいる暇があつたらたくさんの方のメディアに出たほうが断然得だ。」

新しいスーツが完成し上機嫌だったが、その機嫌はこの一通の手紙で損ねられてしまった。

「トニー。最近そう言つて何にもこたえてないじゃない。こんなんじゃない鉄の塊だわよ。」

それに付け加え

「スターク様、私はこれを読んだほうが得策だと思いますが。」

「ジャービスまで……。」

「こちらを書いた方はこの手紙を同じ時間にこれのほかにも五通出しております。何かのチームの結s…」

「わかった。読むよ」

あきらめたトニーは仕方なく読んだ。

「トニー・スターク様」

あなたをアベンジャーズの一員として招待します。

「アベンジャーズ?なんだそれ。ネーミングセンスに問題があるのでは?僕だったらもつとカツコいい名前にしたのに。たとえば『ハイパーピース』とか」

「トニー。あなたの方がずっとタサイわ。」

ペッパーがあきれた様子でそういった。

「まあ行ってみる価値はあるらしいしな。これで後悔したら責任とれよ。ジャービス」

「私には責任をとる能力はありまs…」

「また逃げた。」

彼はその言葉を残し、自家用ジェットで集合場所に向かった。

「そろったようだな…。まったく…。」

濃い髭に坊主頭で眼帯を巻いた黒人がそういった。

「僕の招待状には個性の強いやつらがくると聞いていたが、これには少し度というもの

があるんじゃないのか？世界の中でも五本の指に収まる大富豪、緑色の物理学者、女スパイ、アスガルドの王、タカの目。」

「緑色って、なりたくてなつたわけじゃない！」

金髪のがタイのいい男ともじやもじや頭の白衣を着た男が言い合っている。

「それより、俺らを招集したのは何か理由があるんだろ？」

「アスガルドの王を招待するレベルなんだろ？」

「そもそも私必要かしら？」

それほど特徴のない男と金髪のゴリラ顔、さらにひよろひよろの女が口々に言う。

「ここに集まってくれたことに感謝する。だが全員が集まるのにこれほど時間が必要か？会議を始める時間を11:00からといったのにこうして会えたのが17:00だぞ。お前たちは時間にルーズすぎる！だいた……」

「ベラベラ言ってるけど、会議室とかちゃんと整備しているんだろ？自分のこと棚に上げて説教してたらこの招待状破くぞ。」

「おちつけスターク。」

そう金髪の青年は言った。

「クソ！なんでこんなやつらと……。だいたい世界を守るのは僕一人で十分なはずだ！どんな強敵か知らないけど僕が必ず勝つ！」

「口が悪いぞ、ステイプ。」

「…まあとりあえず、その会議とやらを始めたらどうなんだ? ニック」

もじやもじや博士が眼帯の黒人にそういった。

「そうだな。それあえじやあ会議室に案内する。」

V Sベクター編 第一話 ヒーロー会議

「ということでは会議を始めます。君たちにここに来てもらった理由は紛れもない『地球規模の戦争』が起こりうるからだ。それも相手は極悪犯罪者ではない。そもそも地球人ではない。インベクターが相手だ。そこで、世界的に活躍している君たちを集結させて退治しようと思ったわけだ。と同時に、改めてになるが、今日から君たちを『アベンジャーズ』とよぶ。」

『アベンジャーズ』はダサくないか？僕だったらもつといいのを考えたのに：もつと、『スーパースターズ』とか」

トニーが口をはさんだ。

「そつちのほうがダサイと思うよ。」

「まあとにかく、メンバーを俺から紹介させてもらう。まずアベンジャーズ総司令部はこの俺、ニック・ヒューリーだ。んで、その大富豪はトニースターク（アイアンマン）だ。」

『『その』はないだろう。『そちらの座席にお座りになられてる』だろ？ちゃんとおうな。」

「私のほうが立場が上だ。命令はするな。その盾を持つてる金髪がステイプ・ロジャース（キャプテンアメリカ）。そしてそのものもじやもじや頭の天才物理学者がブルース・バナー（ハルク）だ。んでその隣に座っている女がナターシャ・ロマノフ（ブラックウィドウ）。さらにハンマーを常日頃持つている男が、ソー（マイティソー）。そして残ったこの男がクリントン・バートン（ホークアイ）だ」

「聞いているとやっぱり僕の説明雑じゃないか？ニツク。」

「とりあえず、紹介が終わったところで、詳細を説明しよう。ミセスポッツ、入つてくれ。」

そう言われはいつてきたのはペツパーだった。

「ペツパー？なぜキミがここにいます？留守番は任せましたはずだ！」

「こんな大富豪の済む要塞に留守番が必要かしら？」

そう言い返すと

「万が一のことがあつたら？」

「あら、あなたが自分の作つたものに対して不安を感じるなんて。それとも私のことを心配してくれるの？」

ペツパーは笑いながらそう言った。

「夫婦漫才もいいが話をしてくれ。ミセスポッツ。」

ニツクはすこし焦ってそういった。

「ごめんなさい。ニツク。それでは今回このアベンジャーズ結成に至った経緯を詳しく話すわ。まず、問題のインベーダーはダークジェイン軍団と名乗っているわ。そしてその軍団の親玉が『ベクター』。」

「ベクター？それってもしかして…」

ソーが焦って聞き返す。

「んん？神様が焦るなんて、らしくないな。」

ステイプがそう言う。

「焦るのも無理ないわ。だってコイツは彼の故郷『アスガルド』を滅亡させかけた原因を作った張本人だもの。」

「キミのそのハンマーだったら一発だったんじゃないのか？」

トニーは若干からかったように言った。

「残念ながら無理だ。おれは別の星に出向いてた。」

ソーは冷静に返した。

「話を続けるわ。彼の目的は地球のどこかに存在する『キャンベルンストーン』をほしがっているの。でもそれがどこにあるかが全く検討が付かないの。」

「それがある場所を指し示すものを作ればいいじゃないか。」

バナー博士がそう言った。が、

「ごめんなさい。博士。残念ながらできないの。」

「なぜ？その石に構成されている物質とかわかるだろうか？」

「それが…」

「無理だったわけか…。」

場が静まった。

「…それでそれが見つからなかったら、この星を丸ごと消すそうよ。」

「破壊活動はいつから始める気だ？」

「一週間後よ。」

「なぜもつと早くから対処してなかった？」

バナー博士とトニーは口をそろえて怒った。

「実は三年前から、この活動はしていた。探そうにも探せなかった」

「連絡を取ればいい話だろ！」

「それができればこんな緊急事態にはならなかったとおもうぞ。」

バートンが口をはさむ。

「とりあえず君たちにはこの飛行空母艦で一週間嚴重な監視下においておく。」

「全く…。面倒なものに首を突っ込んでしまった。来るんじゃないかった。」

トニーは嘆いた。

「ちなみに、この空母艦の名前は？」

バナー博士がニツクに聞く。

「名前は特にない。つけたいのか？」

「つけたらいろいろとやりやすそうだしな。」

ソーが言った。

会議が終了した。結局空母艦の名前はバンデル号になった。由来は「束になって戦う『束』」から来た。初日から情報量が多くさらに一日で多くの覚悟を強いられたが誰一人抜けようとしたやつはいなかった。

食事の時間が来た。メンバー全員、予想以上の豪華さにかなり驚いていた。

「君たちにはかなりの負担をかけてしまった。だから、このようなときぐらいは、盛大なものをしなくてはならないからな。」

「これ全部ニツクがやったのか？」

トニーは驚いたように言った

「私だけではないがな。食事が終わったら、終わってるヤツもいるかもしれないがこの空母艦の探検してくれ。どこに何があるのかをしてほしいからな。」

「それならもうジャービスがここにこいた瞬間にスキャンした。もうみんな済んだ。」

トニーは得意げにそう言った。

「それでは皆、自由に食べてくれ。」

ニックはそう言い放つと指令室に向かった。

V S ベクター編 第二話 突然の奇襲

「どうやらニックは指令室に呼ばれたようだ。国際連合からの連絡が入っていた。」

「ニック。体調はどうか?…じやなかった、アベンジャーズの皆は大丈夫か?」

国際連合事務次長のアルバートワトソンだ

「ええ、まあ。クセの強いやつらばかりで最初からかなり手間取ってます。が、安心してください。このニックヒューリーが必ず地球を彼らと守ります。」

「ああ、頑張りたまえ」

ブツツと回線は切れた。

が、その途端に

ドーンっ!!

「何事だ?」

立っていた者全員が床に転げた。もちろんバキング風に楽しんでいるヒーローたちもだ。真つ先に気づいたのはジャービスだった

「空母艦の外に生体反応あり。人ではありません。スターク様。おそらくダークジェイン団のボス、ベクターと思われるます。」

「オイオイ、どうなっている？一週間後じゃなかったのか？」

トニーが若干切れ気味に言った。

「ペツパーさん？どういうことですか…」

バナー博士がそう言いかけたとき

「皆、落ち着くんだ。よく話を聞いてくれ。嘘情報を流したわけじゃない。おそらく…時間を間違えたとか」

「冗談を言う暇があつたらばくたちに命令をくだせ！ニツク！」

ステイブが怒った。しかしもうすでに彼はキャプテンアメリカになっていた。

「とりあえず、外に出て誰なのか確かめたほうがよさそうだな。」

「その必要はないようだぞ。」

バナー博士が言った。

「なぜ？」

トニーが聞き返した直後

パリーンっ！！

敷居のガラスが割れた。そして何者かが姿を現した。

「なにものだ?!お前！」

キャプテンアメリカはそう言い放つと

「私の名はダークジェイン団の三大幹部『エメラ』だ！ベクター様はせっかちなもんでして、お前たちの生体反応をキャッチして飛び込んできたわけだ。」

「おいおい。こんなところで、上司の悪口言つてたら首が飛んでつちまうぞ。」

トニーは言った。そして空いたガラスから鉄の物体が彼に飛んできた。そしてそれを彼は装着し、アイアンマンになっていた。

「ほう、なかなか面白いそうなものを見せてくれるな。だがお前のそれじゃあ俺を倒せない。」

「周りを見てみたらどうだ？俺一人なんて空気じゃないだろ？わかrr…」

グアアアア!!!

アイアンマンの声をかき消すように唸り声が上がった。ハルクだった。

「ほら、破壊神がお目覚めだ。お前はこいつに喧嘩を売ったようだな。残念ながらもうお前の負けだ。こいつは最強、んまあ俺らもお前を退治するのに手は貸すが。」

アイアンマンのおしやべり口が炸裂した。

「それじゃあいk…」

キャプテンアメリカが言いかけて、ハルクは飛び込んでエメラを殴打した。

「——っ!!強い！だが私も負けてられない。」

そういつて、エメラは大群のインベーターを呼び込んだ。

「おい、聞いてないぞ。こんなの！何の真似だ？」

アイアンマンがそう言い放つと

「スターク様、遠隔操作式のアーマーを呼びますか。」

「もちろんだ。四体出せ。」

そういつた直後にものすごい速さでまた鉄の塊が四つ飛んできた。

「いいものを持ってにいるんだな！んじゃ僕も」

そういつてホークアイは弓を構えた、がその直後後ろから

——I control you——

素晴らしい放たれ、ホークアイは倒れた。

「クリント！大丈夫か？！しっかりしろ！」

そう駆け寄ったのはキャプテンアメリカだった。が、その直後に

「お前を殺す」

ホークアイはそう言い彼を殴り飛ばした。

「クソ！どういうことだ！何をされたんだ？バートン！」

キャプテンアメリカは戸惑った。それもそのはず、さつきまで一緒に夕食をとっていた仲間が突然自分を殴り飛ばしたのだから。が、キャプテンアメリカはホークアイを傷つけぬように攻撃をかわし続けた。

「クツソお！やられてばかりじゃないか…。」

キャプテンアメリカがそう嘆いたとき

「何あきらめている、キャプテン！今はこいつらを倒さなくてもいいのだ！全力で追い払えばいいんだ！とりあえず立て！」

ソーはそう言い電撃をまき散らした。

「…っわかった！ナターシャ！手は空いているか？」

「ダメだわ。こつちも結構きつい。喋るだけでもキツイわ！」

ブラックウイドウは二体の雑魚の関節をねじ伏せながらそう言った。

「これじゃあちが明かない！クツソ！どうすれば…」

「ステイプ、クソは禁止な！」

「無駄口をたたくなら仕事をしろスターク！」

結局、破壊活動に飽きたのか、襲撃してきたエメラ達は退散していったが、ホークアイも一緒に行こうとしていた。

「バートン！どこに行く気だ？」

キャプテンアメリカが焦ってそういったが、彼の耳には届いていなかった。そしてエメラが

「この弓使いは俺らの仲間になったそうだ！残念だったな！」

襲撃されてやられっぱなしだったヒーローは心も体もズタボロだった。

「なんでバートンはあつちに行つたんだ？」

トニーはそう言った。

「おれは見たぞ。アイツ、敵に何かされていた。」

ソーが言う。

「おそらく、『マインドコントロール』だ」

どこから現れたのか、ニックがはさんだ。

「マインドコントロール？」

皆は口をそろえて言った。

「おそらくあいつはだれかに後ろをつかれてマインドコントロールをされていたんだろう。とりあえず、ヤツらを追うぞ！」

ステイブはそう言ったが、

「その前にやることがあるだろう。」

トニーがはさんだ。

「やること？」

ソーはわかっていないようすだったが、

「ハルクがいないわ！」

ナターシャが焦ってそう言った。

「あいつを止めないと空母艦より先に地球が終わっちゃうぞ。」

トニーがふざけた

「ジョークを言ってるんで、早く行かなければ」

キャプテンアメリカがそう言いながら空母艦を飛びたつた。